



学会年間展望 歴史地理 先史

著者	高橋 誠一
雑誌名	人文地理
巻	36
号	3
ページ	59-62
発行年	1984-06
URL	http://hdl.handle.net/10112/4316

歴史地理 先史・古代 先史・古代にかぎらず、
歴史地理学の分野で最も特筆すべきは、服部昌
之『律令国家の歴史地理学的研究——古代の空

間構成』(大明堂)の公刊であったといつてよい。氏が長年にわたって蓄積してこられた諸論文をベースとして相当部分に加筆補正がなされた本書は、条里研究の動向と展望・条里の分布と構成・国郡制の編成の3部から成る。当該テーマにおけるひとつの到達点であり、さらに新しい出発点となる本書を高く評価したい。以下、研究分野ごとに得られた成果を概観しよう。

先史・古代の地形を扱った論文は本年も豊富であった。井関弘太郎『沖積平野』(東大出版会)、武久義彦 'Some Considerations on the Surface Changes in Nara Basin' (奈良女子大文学部研究年報26)、日下雅義「摂河泉地域における古代の地形改変」(地評56-4)、杉谷隆「有明海北岸平野における最終間氷期以後の地形発達史、その定量的研究」(地評56-6)、三好真澄「日本における最終間氷期以降の更新世海成段丘の形成期」(地評56-12)、坂口豊 'Warm and Cold Stages in the Past 7600 Years in Japan and Their Global Correlation' (Bulletin of the Department of Geography, Univ. of Tokyo No.15)、青木哲哉「加古川下流域低地における古地理の変遷」(立命館文学454~456)、井関弘太郎「更新世・完新世の境界について」(名古屋大文学部論集史学29)、長澤良太「田辺湾沿岸の海岸地形の形成過程と後期完新世海面変化」(東北地理35-1)、海津正倫「常呂川下流低地の地形発達史」(地理科学38-1)、八木浩司「加古川中流域の第4紀地殻変動」(東北地理35-2)、平井幸弘「小川原湖の湖岸・浅湖底の微地形と完新世最大海進期以降の湖水準変動」(同)、熊木洋太「新庄盆地の地形発達と第4紀地殻変動」(国土地理院報告28)、矢野重文「櫃石島より出土した貝類の考察」(瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告4)など。とくに井関著書は海面変動史と沖積平野の形成の基本問題について集大成したものであり、また武久・日下論文は、考古学的遺跡や条里と地形をダイナミックに論じたもので古代史

の主舞台をフィールドにしたものだけにその価値は一層高い。さらに『第四紀研究』(22-3)では「日本考古学と第四紀研究」特集が企画され、広域テフラや縄文海進等についての新知見が収録された。

古代都市に関する業績が多く得られたのは、本年の特色である。まず藤岡謙二郎編『講座考古地理学2 古代都市』(学生社)では、日本・アジア・近東・地中海沿岸の各古代都市が20名の執筆者によって、研究史をも含めて論述されている。また中国・朝鮮・日本の都城の具体的な比較研究が盛んになってきたことも、実に喜ばしい。岸俊男編『中国の都城遺跡』(同朋舎, 1982)、檀原考古学研究所編『中国の都城遺跡』(奈良県)、西嶋定生『奈良・平安の都と長安』(小学館)、王仲殊(菅谷文則・中村潤子訳)「日本の古代都城制度の源流について」(考古学雑誌69-1)、高橋誠一「古代朝鮮・日本の都市と城壁」(城下町とその変貌, 柳原書店)など。いっぽうで田辺昭三『よみがえる湖都』(日本放送出版協会)、藤田さかえ「長岡京条坊プランと条里」(長岡京28)等々の日本の古代都城の調査研究の進展も急激であり、しかも金田章裕「唐代中国および律令期日本における土地表示法」(史林66-3)のような都城と農地を結ぶ論文が出現するにょよんで、研究の進化は今後ますます加速度を増していくであろう。また国府等についても、米倉二郎「国の昇格と国府の変容」(史林66-1)、木下良「国府付属寺院について」(古代学叢論)、日野尚志「西海道国府考」(大宰府古文化論叢)、高瀬哲郎「肥前国府跡の調査」(日本歴史424)、吉本昌弘「古代播磨国の郡衙」(人地35-4)、伊藤博幸「史跡胆沢城跡の発掘調査」(日本歴史419)などいづれも堅実な業績が得られた。なおレオナルド・ベネーヴィロ(佐野敬彦・林寛治訳)『図説都市の世界史』(相模書房)、オースト・ドラクロワ(渡辺洋子訳)『城壁にかこまれた都市』(井上書院)、ポール・ランブル(北原理雄

訳『古代オリエン特都市』(同)の豊富な図版は便利。

例年通り、条里や開発・村落に関する研究は多いが、中でも奈良国立文化財研究所が1982年から主催した条里制研究会は画期的なものであった。研究会記録は『条里制の諸問題Ⅰ,Ⅱ』(奈文研,1982・83)として公刊されており、条里制起源論を中心として種々の問題が討議された。しかし結果的には、問題の解決にはほど遠いことが改めて確認された、というのは言いすぎであろうか。ともあれ地理学・考古学・歴史学の研究者が一堂に会した意義は大きい。

このような状況下で、吉本昌弘「播磨諸ミヤケの地理的実体」(古文化論叢)、伊藤寿和「讃岐国における条里呼称法の整備過程」(歴史地理学120)、伊藤純「古代住吉地域考察のための覚書き」(地方史研究33-3)、広瀬和雄「古代の開発」(考古学研究30-2)、同「河内古市大溝の年代と意義」(同29-4)、吉越昭久「益田池の復原に関する一考察」(琵琶湖・淀川・大和川,大明堂)、戸祭由美夫「山城国の古代村地名」(同)、金田章裕「山科盆地における12世紀の土地利用と条里プラン」(同)、中山修一「桂川右岸の条里」(同)、服部昌之「淀川河口三角州の条里」(同)、出田和久他『豊後国田染荘』(大分県立宇佐風土記の丘資料館)などの正統的な諸論文が公表された。また『地理』28-10では「水田遺構をさぐる」特集が生まれ、井関弘太郎「弥生時代～古代における稲作の地形環境」、八賀晋「発掘調査からみた古代水田の土壌環境」、工楽善通「水田遺構発掘の経過と現状」、柴田孝夫「方格地割の起源を求めて」のほか、佐賀・青森・兵庫・群馬各県の事例が紹介されている。このように発掘調査は各地で行われているが、条里遺構そのものが検出された例はきわめて少ない。この点、地表の地割と考古学的遺構との関連についての明確な位置づけが急がれるべきであろう。

しかしそれにしても、条里等の破壊に対する積極的な方策は殆んどとられていない。近藤滋「滋賀県における条里保存の一試案」(日本歴史420)や日下雅義「環境保全について」(立命館文学454~456)で若干の提言が行われているが、昨今の地名保存運動の活発さなどと比較するとき、我々地理研究者は、無責任でありすぎてきたことが痛感される。それこそ身を切られるような危機感のもとに総力を結集する必要があるのではないか。

次に交通については、木下良「西海道の古代官道について」(大宰府古文化論叢)、日下雅義「古代の「住吉津」について」(古文化論叢)、和田萃「古代の横大路」(奈良県文化財調査報告41)、千田稔「横大路とその周辺の歴史地理」(同)、藤岡謙二郎「びわ湖・淀川・大和川流域における水運の諸問題」(『琵琶湖・淀川・大和川』)、島田正彦「黒津供御瀬の瀬田川渡河点について」(同)、千田稔「古道の計画性と宗教性」(同)のほか、『環境文化58』(星雲社)の「特集歴史の道一行基の道」には千田稔「行基と地理的『場』」、足利健亮「京都盆地東縁の古道」などが収められている。このうち特に千田・足利論文などでは、従来の駅家や道路の比定という枠を超えて、より立体的な考察がなされていることが注目される。なお前年には足利健亮「大阪平野南部の古道について」(人文28)や『環境文化55』の「特集歴史の道—海上への道」があったことも付け加えておきたい。

以上、数多くの業績のえられた年であったが、他にも伊達宗泰「古墳調査と地籍図」(地理28-7)・侯仁之(秋山元秀訳)「中国における歴史地理学発展の主要な動勢」(地理28-11)、小田洋「古代ギリシアの移動牧畜」(人地35-4)、『地理』28-2の「特集25000分の1地形図」の一部、さらに野外歴史地理学研究所編『近畿野外地理巡検』(古今書院)、岡田精司編『古代の近江』(法律文化社,1982)、神崎宣武『風土と歴史をある

く はるかなる吉備 王国の風景』(そしえて),
落合重信『ひょうご地名考』(後藤書店), 宮城
栄昌ほか『沖縄歴史地図』(柏書房), 渡部忠世
『アジア稲作の系譜』(法政大出版局) なども見
のがしえない。 (高橋誠一)